

震災後、循環器系の病気が急増

東北大と読売新聞東京本社が共同で企画した講演会「市民のためのサイエンス講座2012」が20日、仙台市青葉区のエル・パーク仙台で開かれた。「3・11後の心と体、被災地のヘルスケア」と題して、東日本大震災が心身の健康に与える影響について、同大学院博士課程で学ぶ菅野武・丸森病院内科医長ら3人の研究者が、最新の成果を交えながら解説し、参加者約80人が真剣な表情で耳を傾けた。
(講座の詳細は後日、掲載します)

■発症のピーク
最初に登壇した菅野さんは震災当時、勤務していた南三陸町の公立志津川病院で患者らの命を守るために

尽力した体験を語った。同病院では、非常用電源も水や食料の備蓄も一階にあった。菅野さんは、当時の写真や動画を示しながら「津波が押し寄せることは想定していなかった。水や食料が逃げる先がないのが、いかに重要な問題かを痛感した」と話した。

また、現在、大学院で研究している震災ストレスと消化性潰瘍の関係について、震災発生から10日前後に発症ピークがあることから、「災害発生の早期の段階で薬を投与できれば、より多くの方の命が救えるかもしれない」と語った。

■塩分多い保存食

同大学院医学系研究科の下川宏明教授(循環器内科学)は、震災前後の4か月間の県内の救急車による全ての搬送記録を集めた。2008～10年の同時期の記録も合わせ、計12万4000件を比較、分析し、心不全や脳卒中など循環器系の病気が震災後に急増した

ことを明らかにした世界初の研究結果を披露した。

原因として、被災によるストレスのほか、震災で持病の薬が手に入らなくなったことや、塩分の多い保存食などが考えられると指摘し、「水や食料を入れた『災害時パック』に、普段服用している薬の情報を書いたお薬手帳のコピーなどを入れておくことよい」と提案した。

■精神面の変化

同大災害科学国際研究所の富田博秋教授(災害精神医学)は、命が危険にさらされたり、悲惨な光景を目にしたりで、心的外傷後ストレス障害(PTSD)が起きたり、家族や親しい人を亡くした場合、「なぜ助けられなかったのか」と自責の念にさいなまれたりなど、災害後に見られる精神面の変化について語った。

また、つらい出来事に見舞われた時、精神的に混乱する「ショック期」から、

無力感に襲われる「引きこもり期」などを経て、心身が回復し始める「癒やし期」に至るまでのステップを解説した。PTSDにより、免疫力低下なども心配されることから、「体の健康あつての心の健康。適度な運動や十分な睡眠を心がけて欲しい」と訴えた。

2012年(平成24年)12月21日(金)

読売新聞朝刊

※転載許可取得済み